

## パネル展示「群馬県獣医師会の取り組み」

### 群馬県獣医師会

#### 1 群馬県動物ふれあい事業

群馬県では、「子どもを育てるなら群馬県」を県政のスローガンとしています。21世紀を担う、今を生きる子どもたちが動物とふれあうことにより「命の大切さ」を感じられるように、平成10年度より獣医師を「校医」として小学校に派遣する、「群馬県動物ふれあい授業」を始めました。平成11年度からは幼稚園と保育園も対象とし、今年度は8年目を迎えました。当初に比べて、予算は、実施施設数は5倍に増加した一方で、学校飼育動物の治療費や治療件数は、年々減少傾向にあり、各学校、園での飼育状況が改善されている状況がうかがえます。

本事業では、動物ふれあい教室として、飼育動物とのふれあい方や、世話の仕方、健康管理の方法など、生活科や理科の授業を基本とした技術支援を行っています。

#### 2 消臭チップ導入による教室飼育の推進

動物介在教育は、人間形成の上できわめて重要な効果をもたらします。この効果をより高めるためには、おとなしく飼育しやすい動物を常に身近において飼育することが必要です。そこで、本事業では、ウサギのホーランドロップ種を教室内で飼育する活動を支援しています。

しかし、哺乳動物を教室内で飼育することにより、衛生上の問題、特に臭いの問題が懸念されます。これまでは、トイレに新聞紙やペットシートを利用することが多く、これらは尿の水分は吸収するものの、臭いまでは抑えてくれませんでした。

そこで、尿臭を抑えることのできるものを探していたところ、新聞紙やペットシートの代わりに「消臭チップ」を用いることにより、大幅に尿臭が抑えられることがわかりました。実験の結果でも新聞紙やペットシートに比べて、尿臭を20分の1以下に抑えることが確認できました。1回の必

要量も50g程度でよく、安価でもあることから、今後、動物ふれあい教室などを通して、この消臭チップを県下に浸透させ、教室飼育の推進を図っていきたいと考えています。

#### 3 教師との協力体制の必要性

現在、群馬大学教育学部において、学校飼育動物に関する講義を行っています。講義における学生の感想には、学校で飼育されていた動物や飼育の体験がつづられていましたが、その多くに、悲惨な飼育状況が原因となって生ずる動物に対する嫌悪感が表現されていました。しかし、講義や、動物との正しいふれあい方の実習によって、教師自身が動物についてよく知り、適正に飼育すること、また、子どもたちと動物との適切なふれあわせ方を学ぶこと、などの重要性を理解してきたようです。

現在も多くの小学校や幼稚園、保育園で動物が飼育されています。子どもたちに命の尊さを実感させるためには、まず指導者である教師が動物についてよく知ることが大切です。しかし、教師は動物の専門家ではありません。そこで、教育の専門家である教師と、動物の専門家である獣医師がともに協力し合い、互いの専門性を十分に発揮することにより、学校飼育動物を通して、子どもたちに命の大切さを実感させることができるのです。そのためにはまず、教師と獣医師との協力体制を、教師の意識の面、そして教育制度の面で確立していく必要があります。教師の意識の面では、教育センターなどと協力した教員研修を行い、教育制度の面では、学校獣医師制度の制定することが、具体的な方策としてあげられます。

群馬県獣医師会では、教育現場での飼育動物の適正な飼育と、教育の中での有効な活用を図り、命の尊さを実感させることのできるよう、今後も努力していく所存です。

